

Nineteen Eighty-Four 研究 ―George Orwell による言語と社会への警鐘―

2021 年度入学

人文社会学科昼間主コース

グローバル・スタディーズ履修コース

主指導教員名：井上 彰

氏名：加茂駿介

ジョージ・オーウェルの *Nineteen Eighty-Four* (『一九八四年』 1949 年 6 月 8 日初版発行) は、全体主義体制の恐怖を描いたディストピア小説です。この小説の舞台となる第三次世界大戦後の世界は三つの超大国に分割されています。そのうちの一つオセアニアの党員ウィンストン・スミスを主人公に、ビック・ブラザーを党首とする党の恐るべき管理体制とそれに密かに疑問を抱く彼の行動が物語の軸となっています。全党員に割り振られた識別番号(マイナンバー)や党員のすべての行動を 24 時間監視するテレスクリーン(防犯カメラという名の監視カメラ)など、今我々の身近にあるものの中に潜む恐ろしさをオーウェルは 75 年前に警告しています。

本論文で焦点が当てられているのは、党が従来の英語を意味する Oldspeak(オールドスピーク)に取って代わる言語として採択した Newspeak(ニュースピーク)です。Newspeak は世界のあらゆる言語のなかで唯一単語の数を減らし続けています。その目的は、単語を破壊し続けることで党員の思考範囲を狭めていき、最終的には思考犯罪そのものを不可能にすることです。

加茂君が *Nineteen Eighty-Four* を卒業論文で取り上げるきっかけは、2 回生後学期(2022 年)の「英米文学専門演習 I」でこの作品を読み、イギリス文学を専攻するゼミ生同士で議論を重ねたことにあります。その時に加茂君が提出した学期末レポート「『一九八四年』試論―“THE THEORY AND PRACTICE OF OLIGARCHICAL COLLECTIVISM” の作品における役割―」は、卒業論文の第 2 章へと発展しています。今回の卒業論文では新たに Newspeak という言語の本質(第 1 章)、登場人物(第 3 章)、党による支配体制(第 4 章)についての考察が加わりました。以下卒業論文の「結論」を引用して要旨の代わりにしたいと思います。

結 論

本論文ではジョージ・オーウェルの *Nineteen Eighty-Four* を取り扱って様々な観点からこの作品について論じてきた。どの章で取り上げた要素からでもジョージ・オーウェルが読者に訴えかけたい主張が強く表れており、メッセージ性の強い作品であることが分かった。

第 1 章では作中に登場する言語、Newspeak についてその特徴等を論じた。Newspeak は普通の言語とは違い、語彙を減らすことで思考可能範囲を狭めるという特徴などがあり非常に異質で、この作品の世界観を印象付けるのに効果的な要素であった。特に、*Politics and the English Language* から引用した内容である言語の腐敗と思考の腐敗の間に因果関係があるという点は、Newspeak の特徴においても同様であり、言語の腐敗を表す Newspeak は人々の思考の腐敗を誘発させるためのものであった。*Politics and the English Language* と *Nineteen Eighty-Four* の

両方で述べられているこのメッセージはジョージ・オーウェルが世間に対して提示したかった主張の一つではないかと考察することができた。

第2章では、第二部第九章で登場する *THE THEORY AND PRACTICE OF OLIGARCHICAL COLLECTIVISM* (*the book*) に関して論じた。*the book* は本作品において、党が支配する世界の全体像を把握する上で、また物語の展開を左右する点で、非常に重要な役割を果たしていた。さらに、その内容としては史実とも照らし合わせながら党の思想を客観的に捉えたものであり、そうすることで読者が全体主義社会に対する非難を強め、印象的に捉えるような効果を生み出していた。*Nineteen Eighty-Four* が反全体主義・反共産主義圏において絶大な評価を得たのもこの *the book* 存在が大きかったと推察できる。

第3章では、*Nineteen Eighty-Four* に登場する数人を取り上げて党の支配に対してどのような姿勢をとっているかを比較した。主人公であるウィンストンは心の奥で党を拒絶しており、反抗的な感情を常に抱いている事が読み取れた。一方で、ジュリアは党に対して疑問を抱いておりウィンストンと同じように敵対しているが、党の支配に対して無関心な態度が全面的に表現されている。彼らの年齢は約20歳離れているが、両者の間だけを取ってみても世代の差によって政治体制への関心度合いや党に関する知識量などに開きがあり、世代が巡るにつれて党にとって都合の良い人々が増幅しているという不気味さを感じることができた。また、サイムやパーソンズの子どもたちなど党に絶対的な忠誠心を示している人物とも比較することで、より党の何世代にもわたる支配展望の恐ろしさが浮き彫りとなり深い議論となった。

第4章では、*Nineteen Eighty-Four* における「支配」と「自由」に焦点を当てて論じた。「支配」に関しては、作品の主題となっている党の支配について考えた。Newspeak による言語統制や意図的な貧困化、階級社会の永続化など党は幅広い側面から人々を支配している事が読み取れた。しかし、その反対に党員やプロールなどの人々を党が支配している分、自分たちが得られるはずだったあらゆる自由を失ってしまっているという気づきを得ることができた。この自己矛盾は党の在り方を考える上で非常に興味深い考察となった。さらに自己矛盾は、ジョージ・オーウェルが発表している *Shooting an Elephant* における出来事とも深い関連性があり、彼自身が植民地での警察官としての任に携わった際の強い教訓として残っていることが分かった。そして「自由」に関しては、プロールが享受する「自由」とウィンストンが目指している「自由」の2種類の自由がこの作品では印象的に表現されていた。

以上4章にかけて *Nineteen Eighty-Four* について論じてきたが、作品の至る所にジョージ・オーウェルが全体主義に染まる世間に対して強く警鐘を鳴らしている表現が見受けられた。また彼が残しているエッセイを参照しながら比較するとより深く彼の考え方を理解することができた。

指導教員からのコメント

加茂君が第4章で取り上げた、オーウェルが1936年—*Nineteen Eighty-Four* の13年前—に発表したエッセイ *Shooting an Elephant* (『象を撃つ』) では、語り手である英領ビルマの警察官は暴れる象を射殺するよう依頼されます。現場に駆け付けた彼は象を撃つことに抵抗を覚えますが、背後で見守る数千人の現地民の期待を前に、象を撃たざるを得ない状況に追い込まれます。加茂君は「語り手は自らのことを“an absurd puppet pushed to and fro by the will of those yellow faces behind” (p.19)と表現しており、実際には植民地支配者として現地のインド人よりも立場は上であるにも関わらず自分の自由に動けない」(卒論 p.29) という矛盾点に注目します。そしてこの矛盾が『一九八四年』の中でも繰り返されていると指摘します。第4章「支配」と「自由」

の中で、オセアニアを含む「この三国はお互いが持つ階級社会構造を維持するために継続した戦争状態を求めているのであり、一つの国が違った思想のもと国家の政治を執り行ってしまうと他の二つの国の社会構造も崩壊してしまうのである。したがって、ここでも自分たちが人々を支配する構造を都合よく作り出しているのにも関わらず、支配の方針や教義を変更したくなかったとしても決して変えることはできないという自由の制限を強いられているのである」(卒論 p.28) と論じています。

同様に第 1 章「Newspeak について」でも、加茂君はオーウェルの *Politics and the English Language* (『政治と英語』 1936 年) というエッセイを援用し、「英語の腐敗と人々の思考の腐敗には関連性がある」というオーウェルの分析に注目します。そして「言語が腐敗している人は生きた人間ではなく、まるであやつり人形かのように見えてしまう」というオーウェルの主張が *Nineteen Eighty-Four* の中でも繰り返されていることを指摘した上で、「Newspeak を使用すると人間らしさのない機械的であやつり人形のような話し方になってしまう様が描かれている。党が支配する世界では、このように言語が腐敗していると言える Newspeak を称賛して、言語の腐敗および思考の腐敗を肯定しているように描かれている。しかし、当然 *Politics and the English Language* のエッセイの中でジョージ・オーウェルはその言語の腐敗を痛烈に批判している。このことからジョージ・オーウェルは言語の腐敗が進む世界に対して警鐘を鳴らすために、Newspeak を作中で皮肉的に描いている」(卒論 p.10) と結論づけました。

このように、ひとりの作家が別の作品の中で提示している問題点を卒業論文で取り上げる作品解釈に援用するという取り組み、そしてそうすることで自分の主張により説得力を持たせることができた点を、私は高く評価しました。